

【秩父三十四観音巡礼：伝統的な服装】

秩父巡礼用のレンタル装束セットは、巡礼者が慣例として身に着ける5つの巡礼用品からなる。装束セットは1日から3日間借りることができ、伝統的な装束でちょっと歩いてみたい人のために30分間のレンタルもある。巡礼装束のセットは、秩父観光案内所（西武秩父駅のすぐ南、交番近く）と秩父地場産業振興センター（秩父駅内）の2つの場所のいずれかで、受取と返却の両方が可能である。巡礼装束セットに含まれる用品は、そのうち一点または全品を購入することも可能である。

帽子（すげがさ）

すげがさはスゲで織られており、日よけと雨よけのためにつばが広がっている。日本では巡礼者、旅行者や労働者がスゲの帽子をかぶり、少なくとも千年にわたって着用されてきた。スゲの帽子にはさまざまな形と種類がある。巡礼に出かける際には、すげがさの側面にあることばを書くのがならわしである。秩父の巡礼者が身に着けている帽子には、一般的に次のことばが書かれている。

- 1) 迷故三界城（meiko sangaijō）「この世はすべて城塞の中で迷っているようなもの」
- 2) 悟故十方空（goko jippōkū）「仏の教えを求めることで私は自由になる」
- 3) 本来無東西（honrai mutōzai）「現実には東も西もない」
- 4) 何処有南北（gashō nanboku）「北も南もない、ただ此処があるだけだ」

最後の2つのことばが意味するのは、「北」や「南」などの世俗的な概念は人間の概念にすぎないということである。自己の存在がなければ、方向性はあり得ない。

これらの4つのことばに加えて、文字通り「二人が一緒に行く」という意味の5番目のことば、「同行二人」と書くことも一般的である。これは、慈悲深い観音菩薩様が常に存在していることを指しており、秩父巡礼の旅路だけでなく、人生における道のりにおいても、観音様がともにいて下さると言われている。別の巡礼路においては、観音様の代わりに密教の開祖である空海（774～835年）を意味する場合がある。

袖なしの外衣（おいづる）

巡礼者は、白衣（びやくい）と呼ばれるスタイルの完全な白装束を身に纏うのが慣例である。白い衣服は清浄に関係しており、この装束は、亡くなった人に着せる葬儀用の白い上衣（白装束）と似ている。これは、命がけで未知の地域へ何日も旅をしているということを、ひとりひとりの巡礼者が認識していることの反映だと言われている。つまり、巡礼者が旅路の途中で命を落としたら、すでに埋葬の準備ができているというわけである。

今の巡礼者のほとんどは、巡礼装束一式を身にまわっていないが、多くの人は、「おいづる」と呼ばれる白い袖なしの外衣を着ている。かつて巡礼者は、経典やお香を付帯し、さらに「笈（おい）」と

呼ばれる木箱に仏像などを入れて持ち運ぶのが一般的であった。おいづるの名前は文字通り「笈が擦れる衣服」を意味する。スゲの帽子と同様に、巡礼者はおいづるに「南無観世音菩薩」ということばを書くのが非常に一般的である。巡礼者の中には、各寺の公式印章（御朱印）を御朱印帳ではなく、おいづるに書いてもらう人もいる。

法衣（帯または輪袈裟）

巡礼者が身に纏う外衣は、「五幅の衣（五条）」の簡略版として発展したものである。五条とは、たくさんの小布をつなげて縫い付けた伝統的な僧侶の法衣を指す。この外衣は、伝統的に僧侶が身に着けていた「3つの外衣」（三衣）のうち、一番上に羽織る衣服である。この衣服のサンスクリット語の名前（カーシャーヤ）は「黄土」を意味し、または、黄土で染色された布の端切れを継ぎ合わされたインドの伝統的な僧侶の外衣を指している。

袋（納札入れ）

かつて巡礼者は、寺に参拝した記念として、千社札と呼ばれる紙の札を寺の壁や垂木に貼っていた。千社札は幸運をもたらし、願いを叶えると信じられていたが、数え切れないほどの寺が千社札だらけになったことから、この習慣はなくなった。現在では、この特別な袋に入れて持ち込まれた紙製の願掛け札を納めること（納札）も同様に御利益があると考えられている。多くの巡礼者はまた、乞食の行を行う僧侶が持っていた袋（頭陀）にちなんで頭陀袋、つまり「僧侶の袋」と呼ばれるもうひとつの大きな手提げ袋を付帯する。

巡礼者の杖（金剛杖）

「金剛杖」は、巡礼者にとって不可欠とされる唯一の巡礼用品である。歩行用の杖として有用であるのは当然だが、それとは別にこの伝統的な杖は、象徴的な大きな意味も持っているのである。その名前は「ダイヤモンドの杖」を意味しており、密教とその開祖である空海のことを指している。そして空海が、全ての巡礼者と一緒に歩くと言われており、実際、巡礼者の杖は空海の化身であると言われていた。このため、毎日、一日の終わりに杖の付け根を掃除し、夜には部屋の床の間に安置するのがならわしである。

金剛杖にはもう一つの実用的な用途もある。杖の上部には、仏教の伝統的な5つの要素である土、水、火、風、空を指すサンスクリット文字が刻まれた仏塔が彫られており、杖の上部についているカバーはそれらを保護している。巡礼者が行き倒れたとき簡単に埋葬してもらえるように死に装束を着るとよく似た意味を持ち、金剛杖に仏塔が彫られていることで、墓標として使用することができるのである。おいづると同様に、金剛杖にも御朱印を入れてもらうことができる。